

地域学の現在
— 鳥取大学地域学部の挑戦 —

柳原 邦光*

A Theory of Regional Sciences:
A Challenge for the Faculty of Regional Sciences, Tottori University

Kunimitsu YANAGIHARA*

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第7巻 第1号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.7 / No.1

平成 22 年 6 月 30 日 発行

June 30, 2010

地域学の現在

－ 鳥取大学地域学部の挑戦 －

柳原 邦光*

A Theory of Regional Sciences:
A Challenge for the Faculty of Regional Sciences, Tottori University

Kunimitsu YANAGIHARA*

キーワード：グローバル化，国民国家，個人化，生の充実，わたし（自分），人と人とのつながり，
生きられた空間，ローカル，実践，政策，移動

Key Words：globalisation, nation-state, individualisation, a satisfying life, self, social ties (sociabilité),
espace vécu, local, practice, policy, immigration

はじめに

鳥取大学地域学部は、元々は教育学部であった。それが「教育地域科学部」になり、さらに「教育」が消えて「地域学部」になった。「地域」を看板に掲げた国立大学の学部としては岐阜大学の「地域科学部」に次いで2番目、地域学部としては国立大学で最初の学部である。地域系学部としての歴史は短い。教育地域科学部が5年間、地域学部になって丸6年がすぎたところで、11年間の蓄積しかない。

しかし、この間、教員は一生懸命、授業を創ってきた。教育地域科学部では「地域研究論序説」（地域政策課程と地域科学課程の1年生必修科目）、地域学部では、2科目の学年必修科目、すなわち、「地域学入門」（1年生）と「地域学総説」（3年生）においてである。「地域学入門」は、学生にできるだけ「地域」という発想に慣れてもらうために設けられた科目である。そのため、地域に関する理論の紹介は最小限にとどめて、地域で優れた実践活動をされている方々にお話をうかがって、地域でどんな動きがあるかを知ること重点を置いている。また、参加型の要素も取り入れて、受講生が地域に関心をもつことができるよう工夫を凝らしている。そのせいもあってか、受講生の授業評価はきわめて高い¹。2年生になると、「地域調査実習」がある。学生たちは1年間、あるいは1年半をかけて調査し、その成果を住民向けに発表し、最後に報告書にまとめる。3年生の「地域学総説」はこうした教育課程の総仕上げともいべきものであり、地域学を理論的に学ぶことになっている。

筆者が担当してきたのは主に「地域学総説」である。授業実施責任者を務めるとともに（2006－

* 鳥取大学地域学部地域文化学科

¹ 渡部昭男・竹川俊夫・土井康作・野田邦弘・岡田昭明「初年次必修科目『地域学入門』における地域学部新入生の変容－2009年度における授業実践のまとめ」、『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第6巻第2号，2009年，参照。

08年度),この授業が何を目指しどのような成果を得ることができたのか,鳥取大学地域学部の地域学がどのように形成されつつあるのかを,授業報告や共同論文によって示してきた²。「地域学総説」は単なる必修科目という以上の使命を帯びているのである。というのも,地域学の決定版といえるものがいまだ存在していない以上,われわれが自ら地域学に確かな形を与え,創っていかねばならないからである。「地域学総説」は,本来,学生向けの授業であるが,同時に,地域学を理論化する場としても位置づけられているのである。したがって,授業プランの作成にはかなりの時間をかけている。プランは検討段階から地域学部教員の研究組織である地域学研究会の幹事会に数回にわたって報告される。ここでも検討されて,プランが完成するのである。授業には各学科の代表を含めて10名くらいの教員が15回のすべてに関わっている。さらに,授業が終わると,毎回,その日のうちに,反省会と次の授業の打ち合わせをしている。これに理論化のために必要な作業も加わるので,2010年度の場合,同じ日の昼休みと夕方の2回に分けて話し合いをおこなっている。

さて,そこで本稿の目的である。地域学部では,これまでの地域学総説の成果をベースにして書物を出版することを目指している。今年度の地域学総説もこの出版を視野に入れて構成されており,教員の報告を通して地域学がいつそう深化することが期待されている。本稿では,出版の予備作業として,これまでのわれわれの研究蓄積に基づいて現時点での地域学構想を提示する。地域学の枠組みを共有しつつ,これを修正し,さらに積み重ねていく必要があると考えるからである。また,鳥取大学地域学部以外のところでも様々な地域学が生まれているので,それらとの比較を可能にするためである。差異化することが目的ではない。鳥取大学の地域学は社会に対していかなる貢献ができるのか,それを確認するための条件を整えたいのである³。

とはいえ,本稿には若干の留保が必要である。これから述べることの多くは「地域学総説」での教員の報告がベースとなっているので,地域学部で形を成しつつある地域学を映し出しているはずであるが,筆者の思考の癖や私見が混じってしまうのは避けられない。できるだけ区別するつもりであるが,本稿は,鳥取大学地域学部の地域学構想に関わるものであるとともに,筆者の個人的な地域学構想でもあるというべきかもしれない。

1. 地域学の基本的な考え方

(1) 「地域」という言葉

最初に「地域」という言葉の問題から考えてみよう。「地域」は日常的によく耳にし,口にする言葉であるが,よく使われているということは,よく理解されているということと同じではない。そもそも,「地域」という言葉はいったい何を指しているのだろうか。たとえば,「地域で子どもを守る」とか,「地域を巻き込んで」という。こういう場合は,生活している日常の空間とそこに暮らす

² この論文の最後にある【「地域学総説」関係の論文等】を参照。

³ 地域学について著作として出版されたものとしては,たとえば,京都造形芸術大学編,編集責任中路正恒,『地域学への招待』(改訂版),角川学芸出版,2010年を参照。地域学推進の重要性の認識に関しては,日本学術会議太平洋学術研究連絡委員会地域学研究専門委員会報告「地域学の推進の必要性についての提言」(2000年6月),とくに1-3頁を参照。併せて日本学術会議『日本の展望—学術からの提言2010』(2010年4月)を参照。その他,地名等に「学」をつけた「地域学」や「地元学」については,廣瀬隆人の簡潔にして要を得た整理がある。廣瀬隆人「ローカルな知としての地域学」,日本社会教育学会編『日本の社会教育』,国土社,52号,2008年。研究動向の整理をすべきであるが,それは別稿に譲って,本稿では鳥取大学地域学部の地域学構想の紹介にとどめる。

人々を指している。「生活空間」とか、「住んでいるところ」、「地元」と言い換えてもいいだろう。しかし、もっとはるかに広い空間を想定して「地域」が用いられる場合もある。また、よく似た言葉に「地方」や「地区」、「コミュニティ」がある。言葉が違う以上、それが示す対象も異なるはずであるが、「地域」がこれらと同じ意味で使われるときもあるようである。

どうやら「地域」は、意味がはっきりと特定されることがないままに、さまざまな意味で用いられているようだ。筆者が学生だった1970年代後半のことを思い出してみると、一般には「地域」という言い方をしなかったように思う。いつからこんなに頻繁に用いられるようになったのだろうか。しかも何らかの期待を込めて、いい意味で、広く、一般的に使われているようである。これ自体がなかなか興味深い問題だが、筆者は、この現象は社会が何かを求めていることの現われではないかと考えている⁴。

(2) 鳥取大学の地域学の基本的な考え方

次に、鳥取大学の地域学（以下、とくに意味を明記せずに地域学という場合、鳥取大学の地域学を指している）がどういう前提にたっているのかを紹介しよう。地域学部のホームページに地域学を説明した文章があるので、最初にその一部を紹介しよう。

人々が生活している空間の広がりとそこでの社会関係、それが「地域」です。この世界は多様な規模と内容からなるさまざまな「地域」が寄り集まってできています。地域を考えることは人類が解決を迫られている多くの課題を考えることに他なりません。既存の学問体系を「地域」の視点から再構成し、地域に存在するさまざまな公共課題の解決を目指す、これが「地域学」です⁵。

この文章の中で重要なのは次の2点である。ひとつは、「地域」を「人々が生活している空間の広がり」としての社会関係としていることである。「社会関係」には様々な意味合いがあるが、ここでは、人々がつくり出している、了解された関係のあり方としておこう。もうひとつは、「地域学」が「地域に存在するさまざまな公共課題の解決を目指す」という点である。「公共課題」というと難しく感じられるが、要するに、地域に暮らす「みんなに関わる問題」ということである。まとめれば、地域学は、生活の空間に存在する了解された関係のあり方において生じた、みんなに関わる問題の発見と解決を目指している、ということである。

これではあまりにシンプルすぎるので、もう少し踏み込んで考えてみよう。おそらく誰もが「人として安心して幸福に生きていきたい」、そう思っているはずである。それには、自然環境や社会環境をはじめとして、ある程度、条件が整っていなければならない。その条件のなかには、物質的な条件もあるが、きわめて重要なものとして、人と人との結びつきや互いに支え合う関係といった人

⁴ この問題については森岡清志編『地域の社会学』（有斐閣、2008年）4-6頁を参照。ここでは、「地域」という言葉の多義性、それが指示する空間的範囲の多重性が指摘されている。このようなあいまいな「地域」という言葉が頻繁に使用される理由として、同書は日常生活との深い関わりに着目し、「地域」を次のように説明している。「居住を軸とする日常生活は、居住を軸として拡がる社会関係と空間を舞台にして展開されている。この社会関係と空間こそ、人々が語る〈地域〉にほかならない。「地域」が使用されて「地方」に取って代わるようになるのは1980年代半ば以降のことで、「地域学」の登場は市町村合併と関係があるという指摘もある。赤坂憲雄『婆のいざない 地域学へ』、柏書房、2010年、213頁。

⁵ http://www.rs.tottori-u.ac.jp/about-gakubu/chiikigaku_policy/index.html

と人との関係のあり方も含まれている。このようなさまざまな条件が合わさって、緩やかであまいだが、何らかの意味あるまとまりをもっている空間、それが「地域」である。このような「地域」は、自然環境という土台の上で歴史的に長い時間をかけて形成されてきたものであるから、その特質は場所によって違うはずである。「人として安心して幸福に生きていきたい」という思いは同じでも、その具体的な形、実際のありようは場所によって違うということである。たとえば、何かを食べて「おいしい」と感じる点では同じでも、何を食べたときにおいしいと感じるかは、場所によって、土地によって違う場合がある。それと同じことである。こうしたそれぞれの地域が独自にもっているものを、「地域の個性」とか「特性」、あるいは「地域性」ということができる。この地域性を前提にして、「人として安心して幸福に生きていく」ために必要な諸条件とはなにか、それを実現するにはどのような方法があるのか、こうしたことを考えるのが、地域学の基本的な仕事である。

これを、特に、人と人との関係についていえば、人は「人として安心して幸福に生きていく」ために、人と人との結びつきや支え合う関係といった何らかの関係とそのための場を必要としているということである。地域性を踏まえてこのような「関係」と「場」を発展させるための諸条件と方法を考えるのが、地域学の仕事なのである。

以上から、地域学の独自性は、一人ひとりの「生の充実」や「わたしの幸福」、「わたしたちの幸福」の実現を地域という、緩やかで曖昧な空間的な枠組みにおいて考えることにあるといえる。

次に重要なのは、地域は「わたし」が従属しなければならない絶対的な、変わることもない存在ではない、ということである。地域は現に在るもの、存在するものであると同時に、未だ実現していない、こうであってほしいと望まれるものでもある。つまり、「地域」というとき、「現実の地域」と同時に、「望まれる地域」を想起している。地域学はこの「現実」と「理想」との隔たりをしっかりと認識して、これを少しでも埋めるように、絶えず「現実の地域」を見つめ再検討し、必要に応じて工夫を重ねていくのである。そのために、あらゆる学問領域が動員される。それだけではない。生活の現場で生まれてくる知や知恵もきわめて重要である。この意味で、地域学はまさに総合の学だといえるだろう。

したがって、地域学は決して「まちおこし」や「地域活性化」といった次元だけにとどまるものではない。

2. なぜ、今、地域なのか？

以上の点をさらに掘り下げて一つひとつ検討してみよう。地域学が目指しているのは、究極的には、一人ひとりの「生の充実」や「わたしの幸福」、「わたしたちの幸福」の実現に寄与することである。しかし、これは地域学に限らずすべての学問が目指していることでもある。したがって、繰り返しになるが、地域学の独自性は、この目的を達成するために地域という緩やかで曖昧な空間的な枠組み、ある意味で集団的な枠組みを設定して考える点にあるといえる。

それでは、なぜ、今、地域なのか。この問いに簡潔に答えることは容易でない。実にさまざまな分野において、地域で考えることの必要性が認識されつつあるからである。「なぜ、今、地域なのか」という問いは、小さな問題ではなく、「現代とはいかなる時代か」という大問題に関わっている、と地域学は考えている。この問題について2つの角度から検討しよう。

ひとつは国家との関係である。わたしたちの生活は様々な制度によって支えられている。これらの制度の根底には、西欧近代が生み出した理念がある。「自由」で「平等」な「個人」、「人権」とい

う理念である。この理念は国民国家によって実現されると考えられてきた。現在の憲法をはじめとして、国家の諸制度はこのような考え方からできている。国民国家という枠組みこそが制度構築の大前提になってきたのである。ところが、グローバル化が進む今日では、EU（欧州連合）の例からも明らかのように、国民国家の役割は変わり、その比重は低下しつつある。もはやすべてを国家という枠組みだけで考え決定できる時代ではない。この国家の役割変化が「地域」への着目と深く関わっている。

これについて光多長温（鳥取大学特任教授）の見解を挙げておこう。光多は、「なぜ地域なのか」という問いに行政や経済のあり方の変化から次のように答えている。冷戦終結段階以降、先進諸国において国の役割と地方の役割は大きく変化し、地方の役割が大きくなっている。国の論理で地方の論理に蓋をしていた時代は終わったのである。行政構造は地域主体になりつつある。行政機能についても、国家の役割は個々の単位で調達するよりも共同で調達した方が効率的であるような機能に限定される方向に変化しつつある。国家の指導の下に全国画一的に供給される行政サービスよりも、地域に必要な行政サービスを地域が独自のやり方で調達する方が効率的だと考えられるようになったのである。産業構造の変化も重要である。サービス経済化と「規模の経済」化にともない、東京一極集中とそれ以外の地域の地盤沈下が顕著になっている。これが新たな地域問題として人々の危機意識を高めているのである。また、低成長と高齢化の時代になって、人々が地域に根差した生活意識をもつ傾向にあることも重要である⁶。

要するに、冷戦構造の崩壊プロセスとともに、国家の諸制度のあり方も含めて、人間の生活に深く関わる基本的な諸問題が重視されるようになり、国家よりも人々の生活に近い地域を単位として考え解決していく必要性が認識されるようになったというのである。光多によれば、このような動きは近代の学問体系のあり方それ自体を問うことになった。現実の諸課題に対応するために、様々な領域を横断的に統合する学問領域の必要性と、地域という空間単位での研究を積み重ねていくことの重要性が、認識され始めたのである。「地域学」への着目である。

もうひとつ西欧近代の生み出した重要な価値観に関わる問題がある。ここでいう価値観とは「個人」とそれを何よりも尊重する考え方である。これについても、「個人の自由」が徹底して追求され、個人化（individualisation）が著しく進んだことによって、新たな問題状況が生まれている⁷。人々がかつてのように強固な集団的な枠組みや規範に縛られることを好まなくなった。このようなものとのつながりを断ち切ってこそ自由になれる、そう考えられてきたからである。実際、この願望はある程度実現している。しかし、その一方で、国家の諸制度は機能し難くなっている。また、

⁶ 柳原邦光、光多長温・吉村伸夫・一盛真・家中茂・藤井正「『地域学』を創る—鳥取大学地域学部の試み—」『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』第4巻第3号、2008年、373—375頁。廣瀬隆人によれば、「山形学」、「いわき学」、「江戸東京学」などのように地名を付けた地域学や地元学が1980年代後半から各地で登場したが、それは、1980年代後半から90年代初頭にかけてのバブル景気にもなう地域開発の結果、「地域の豊かさ・良さ」を見失ったことへの「地域住民からの異議申し立てであり、抵抗としてスタートした」という。廣瀬はその特徴を大きく3点にまとめているので引用しておこう。①自らの調査研究や学びを通じてその地に生きることのゆるぎない肯定感を獲得すること、②肯定感を獲得した上で、地域の課題や現実を学び、地域に暮らし、生きる「自分とは何か」を批判的に振りかえること、③地域の課題と自分の生活を問い直すことによって、自分が地域で生きる意味を問い直し、地域を変えていく主体となること、である。廣瀬「ローカルな知としての地域学」、41、45頁。

⁷ これについては次の論文を参照。今日の問題点がよく整理されている。ジャン＝ポール・ヴィレーム「超近代（ultramodernité）の文脈における宗教」、ジャン・ボベロ、門脇健編『揺れ動く死と生』、晃洋書房、2009年、169—197頁。

集団的なものにも守られなくなって、人々は今、社会的なリスクに直接さらされている。しかも自分で何とかしなければならぬと感じるところまで追い込まれている。人に頼らず、何もかも自分でしなければならぬとか、問題があれば「自分のせいだ、自分で何とかしなければ」という感覚である⁸。

わが国では、最近、地縁も血縁も、「社縁」ももたない社会、人とのつながりを欠いた社会を意味する「無縁社会」という言葉が使われるようになってきている。誰とも親しい関係をもつことができないままに生活し、誰にも知られることなく死んでいく人が増えているという。亡くなったことさえ、しばらくはわからない。遺体や遺品の引き取り手もない。そのために、それらの処理を専門とする仕事が生業として成り立つまでになっているという⁹。確かに人は「個人の自由」を追求し集団的な枠組みや規範から自由になることができたかもしれない。しかし、「無縁社会」という言葉が象徴しているように、それまで暮らしを支えてきたさまざまな絆やつながりまでも失って、「孤立」を深めているのかもしれない。これはきわめて「生きにくい状況」だといわねばならない。

この「人が人として生きにくい状況」について、内山節の見解を紹介しよう。内山は立教大学の教員で、西欧哲学が専門であるが、1年の半分を東京で、もう半分を群馬県の上野村という山村でちょっとした農業をしながら暮らしている。こうした生活の中からつかみ取ったことが内山の見解のベースになっているようである。内山は次のようにいう。近代的世界は〈ローカルであること〉を解体しながら、市場空間・市民社会・国民国家という普遍的世界をつくりだし、そこに人々をのみ込んできた。近代的個人という理念もまた、自然や歴史、地域や協同といった、具体的な関係の中で生きる人間の世界を壊し、人間を普遍的な個に変えて、交換可能な個人にしてしまった。自由・平等・友愛の理念はあまりに人間中心主義的である。そのために、人間が長い間自然や風土などとの間に築いてきた豊かな諸関係を視野の外に追いやった。結局、人々は自分の居心地のよさにしか関心を示さなくなり、連帯やさまざまな関係性を見失った。要するに、普遍性と抽象的な個人をよしとし、ひたすら個人の自由を追求する近代の理念は、人々の視野を狭め、自然をはじめとする複雑な諸関係のなかで展開される人の生活の様々な側面とその意味を見えなくしたというのである。

さらに内山はいう。生きるとは何か、それはその人の暮らす文明、文化、歴史のなかでさまざまにつかみとられていくものだ。普遍化できるものではない。普遍性にのみ価値を見出す精神の習慣から解放されねばならない。そのために「私自身から出発しよう」、「『里』というローカルな世界」からすべてを組み立てなおそうと。内山のいう「里」とは何か。それは必ずしも村ではない。「自分が還っていききたい場所」、「自分の存在の確かさが見つけられる場所」である¹⁰。

以上のことを合わせて考えてみると、これまで制度的に私たちの暮らしを支えてきた、西欧発の国民国家と自由で平等な個人という理念、「普遍的」だとされてきた理念だけでは、「わたし(たち)の幸福」は実現できないのではないかという思いが大きくなりつつあるようである。ここでいう「普遍的」とは、どんな場所でも、どんな時代にも通用すべきもの、間違いのないもの、という意

⁸ 宇野重規「社会科学において希望を語るとは 社会と個人の新たな結節点」、東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』、東京大学出版会、2009年、273-276頁。

⁹ NHKスペシャル「無縁社会～“無縁死”3万2千人の衝撃～」、2010年1月31日(日)午後9時00分～9時58分放送、総合テレビ放送。

¹⁰ 内山節『「里」という思想』、新潮社、2005年、「はじめに」を参照。内山の見解は「ローカルな場所からの出発」(『地域学への招待』所収)に簡潔にまとめられている。本文でも述べたように、内山は近代的個人と近代的世界(「人間の本質は個人にある」とし、「すべてが個人に始まり個人に終わる、裸の個人の世界」)には批判的である。「私」は他者との関係においてつくられると考える内山にとって、問題は、人間が関係

味である。西欧近代は、自分たちの見出した価値観をこのようなものだと考えて、それを世界に拡大することをよしとしてきたのであるが、それだけではうまくいかないのではないかという疑念が出てきたのである。

このような状況において、今求められているのは、徹底して個人として生きることでも、国家に代表される、一人ひとりの暮らしから遠く離れた巨大な存在に守られて生きることでもない。国家と個人の間において、もっと身近なところで人々を支えるものではないだろうか。というのは、人はみな、なんらかの具体的な「つながり」、「支え、支えられる関係」を必要とし、そのための「場」なくしては生きられない、と思われるからである。

さらにいえば、「つながり」というとき、人と人とのつながりに限らないかもしれない。土地とのつながり、過去や過去の人々とのつながり、土地の文化とのつながりもあるだろう。内山の言葉で言えば、「諸関係」である。過去とのつながりについて、内山は、長期にわたって繰り返されてきた人間の営みは、景観や土地、建物などに刻印され無言の記憶となっているという。つまり、過去は完全に過ぎ去ってしまったのではなく、このようなものを通して現在に生きていて、人に過去との確かなつながりを感じさせる、ということであろう。これを読んだとき、筆者は「なるほど」と納得した。古いものに接したとき、なぜか心が落ち着くが、その理由をうまく説明していると思ったからである。わたしたちには、何かとつながっているという実感が必要なのかもしれない。やはり、人は、誇りと生きがい、喜びを感じて生きたい、他者とつながって互いに支え合う関係を築いて、ここが自分の居場所だと思って生きたい、そう実感できる場を求めているのではないだろうか¹¹。これこそが「地域」であって、地域という発想の原点にあるのは、このような要請であろう。地域学は現代という時代の抱える根源的な問いに応えなければならないのである。

3. 現実の地域と望まれる地域

西欧近代にとって「個人」は理想的な人間像である。抽象的で普遍化された個人、言い換えれば、理性的、合理的で主体的に判断し行動できる人間である。これが国民国家やデモクラシーの根底にある人間像である。

しかし、これは理想であって、人間の様々な側面のすべてが、人間の欲求のすべてが表現されているわけではない。実際、わたしたちの視線を生身の人間である「わたし」に移してみれば、「わたし」のなかに決して普遍的とはいえない地域性、地域文化ともいべきものがあることがわかる。言葉遣いや振舞い方、ものの考え方や感じ方、規範など、その多くは育っていく中でいつの間にか身につけたものである。主体的な選択の結果ではない。一人ひとりが自分の判断で選び取ったものではないのである¹²。このような特性はとくに意識しないかもしれないが、人と比較されたり、人か

を喪失してしまったことである。「関係とともに生きること」が不可欠であり、「地域」はそのひとつの形である。「様々な関係がみえる、感じられる世界」、それが「地域」だという。

¹¹ 「つながり」と「地域」との関係については、柳原邦光「松場登美さんの仕事に学ぶ」、『地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）』、第7巻第1号、2010年を参照。

¹² この点に関して、フェルナン・ブローデルの「日常性」についての見解を紹介しよう。「私が出発したのは日常性であった。生活の中でわれわれはそれに操られているのに、われわれはそれを知ることすらしないもの。習慣（l'habitude）—慣習的行動（la routine）と言うほうがいいかもしれない—、そこに現れる何千という行為は、それら自身で完遂され、それらについて誰も決定せねばならないということはなく、本当のところ、それらはわれわれのはっきりとした意識の外で起っている。人間は腰の上まで日常性の中に浸—

ら批判や否定されたときに、「居心地が悪い」とか「生きにくい」と感じて、はじめてわかるものである。このように考えれば、こうした感覚を生み出す場、現実の地域が確かに存在していて、人はそこから自己の個性の重要な部分を獲得しているといえるだろう¹³。さらにいえば、地域は、人の生のあり方や生きているという感覚を支える、何かとても重要なものをわたしたちに与えてくれているのかもしれない。このような意味で、地域は「生の充実」や「わたし(たち)の幸福」にとって欠かすことのできないもの、「よりどころ」であると思われる。西欧近代の個人、理想的な人間像は、生身の人間のもつこのような側面から目をそらしてきたのではないか。地域学は誰もがもっているはずの、このような地域性を認めることからスタートする¹⁴。

しかし、ここでひとつ問題がある。人は地域を必ずしも「よりどころ」として感じていないかもしれない。それどころか、個人を束縛するものとして忌避することさえ少なくない、ということである。たとえば、地域学総説では、いつも最後の5分間に学生に感想や質問・意見を書いてもらうが、そのなかに次のような一文があった。「わたしの両親は、『地域なんか要らない』とっています。」これは地域に対する強烈な拒否感情である。どうしてこういう感情が生まれるのであろうか。

地域は確かに支えかもしれないが、その半面で、人を縛り、行動や考え方・感じ方を制約するところがあるからであろう。現実の地域は「わたし(たち)の幸福」の「よりどころ」になっているとばかりはいえないのである。地域を、人と人とがつながり、一人ひとりが生きられる具体的な場、この意味でわたしたちの生にとって不可欠なものという認識に立つとすれば、現実の地域がもっている二つの側面をしっかりと受けとめ、できるだけ「誰もが生きやすい状態」に近づけていかなければならない。地域を一人ひとりの「わたし」が生きられるように、誰もが「ここ」が自分の「居場所」だと思えるようにしていくこと、といってもいい。地域学にとって現実の地域は決して絶対的な、不変のものではない。現実を尊重しながらも、「わたし(たち)の幸福」の「よりどころ」であるように、つねに見直しと再構築の対象であり続けるのである。地域は、現に存在するものであると同時に、未だ実現していない、これからそうあってほしいと願望されるものでもある。

4. 地域学とは何か

(1) 実践の学としての地域学とその役割

それでは、このような地域を研究対象とする地域学とはどのようなものなのだろうか。地域にのぞむとき、学術的にみれば、地域性をトータルに捉えることが求められるだろう。しかし、実際には、そこまでする必要はないかもしれない。というのは、地域学の重要な特徴のひとつが「実践」だからである。

かっているのだと私は思う。今日に至るまで受け継がれ、雑然と蓄積され、無限に繰り返されてきた無数の行為、そういうものがわれわれが生活を営むのを助け、われわれを閉じ込め、生きている間じゅう、われわれのために決定を下しているのだ。」フェルナン・ブローデル『歴史入門』(太田出版、1995年)、18-19頁。
¹³ 地域の文化的個性と「生の充実」や人間の尊厳との関係については、吉村伸夫(鳥取大学地域学部地域文化学科)の見解を参照。柳原他「『地域学』を創る—鳥取大学地域学部の試み—」、376-377頁。

¹⁴ 吉村によれば、政治哲学の領域でも同じような変化が見られる。地域といえるような概念が出てきたのはリベラリズムとコミュニタリアニズムとの論争を通してであり、冷戦時代の終焉を迎えるまでは、普遍の人間像を前提とするリベラリズムが主流であった。それ以後、地域は人の生の充実にとってきわめて重大な意味をもつという考え方が大きくなってきたのであり、このような観念は比較的新しいという。柳原他前掲論文、375-376頁。

「実践」をどのようなものとして考えるか、これはとても重要な問題である。「実践」というと、まず思いつくのは、自分の頭と身体とを使って考え実際に何か行動すること、実行することである。その代表的なものが政策であろう。もちろん、このような「実践」は重要である。しかし、「実践」はそれだけではない。先ほど「現実の地域」と「望まれる地域」があると述べた。換言すれば、「現実」と「理想」である。この二つの間には、当然のことながら隔りがある。現実を尊重しつつ、この隔り埋めるべく努めるのが地域学である。広い意味での「実践」とは、この努力のことだと筆者は考えている。「いま、ここ」が「わたしの居場所」だと思えるように、「誰もができるだけ生きやすくなる」ように、あれこれ悩み、よくよく考えること、日々小さな工夫を積み重ねていくこと、これもまた実践であろう。地域学のいう実践は、政策的な実践から日常的な小さな実践までをいうのである。

ここでは地域学がこうした意味で「実践の学」であることを確認しておきたい。そして「実践の学としての地域学」にとって、実際に何か問題が起こったときや、どこか問題がある、なんとかしたい、そう思ったときに、あるいは何か足りないと感じたときに、何をどこまで調べるのか、どう対処するのか、どう行動するのが決まるのである。

ところで、ここでいう問題とは何か。よく地域の問題として認識されるのは、雇用問題や少子高齢化のように生活の基盤そのものが揺さぶられているときである。「限界集落」という言葉もあるほどで、これは確かにきわめて深刻な問題である。したがって、経済が地域学においてもきわめて重要なファクターであることは、論じるまでもない。しかし、これだけではない。前述したように、「生きにくさ」、「息苦しさ」、あるいは「物足りなさ」といった「目に見えない問題」もある。「暮らしを楽しみたい」という欲求もあるだろう。経済に関わる問題だけでなく、人の暮らしや生き方に関わることも、地域の重要な問題なのである。

地域は「一人ひとりが生きられる場」としての役割を期待されている。地域はこの役割を果たすことができているだろうか。そうでない場合、地域はどうあればいいのか、どうすればいいのか。これは地域学の重要な検討課題だが、この課題は常に具体的な形となって現れる。この具体的な問題に直接「解答」を示すことは、地域学の役割ではない。それは当事者のすべきことであるし、当事者にしかできないことである。具体的な課題を前にして、当事者がどのように「問い」を立て（つまり、具体的な課題の根底にある問題は何か、考慮すべきポイントは何か、どこから何を基準に考えるべきか、ということから考えること）、それをいかにして解決するかを考えるためのポイントと判断材料と方法を提示することが、地域学の役割である。

(2) 空間の大きさ

地域というとき、どんな空間が想定されているのか、どれくらいの大きさの空間なのか、これも気になることである。地域の空間的な大きさは、検討すべき問題に応じて異なる。決して、あらかじめこれこれの大きさが地域であると決まっているわけではない。

ただそうはいっても、地域というとき真っ先に思い浮かぶのは、やはり自分自身の身体が存在している場、実際に生活しているローカルな空間である。「生活空間」とか「地元」といってもいい。内山は、この空間を「自分の存在の確かさが見つけられる場所」だとして、これを「里」と表現している。筆者も、まずはこのローカルな空間から考えてみるのがいいのではないかと考えている。これについては、第5章「身近な小さな世界から考える」で私見を紹介したい。

このローカルな空間は「狭い」と感じられるかもしれないが、この空間で考えても、決してすべ

てがローカルなレベルで完結しているわけではない。国家の諸制度もそうだが、私たちの社会をつくりあげている原理や原則、社会構造、グローバルな動きなども密接に関わっている。規範や考え方や感じ方に関しても、もっと大きな空間で共有されているものがある。ローカルな空間は大きな構造や関係性のなかにあるのである。ローカルな空間から検討し始めたからといって、決してローカルなレベルにとどまるわけではなくて、ここから出発してより大きな構造や関係性を考えようということである。

ところで、最もなじみのある空間単位といえば、都道府県とか市町村といった行政区分であろう。わたしたちが行動したり働きかけたりする単位がこの区画であることが多いので、地域が行政区分と無関係とはいえないが、イコールでもない。このことは平成の大合併を経験したわたしたちにとってあまりにも自明なことであろう¹⁵。「地域とは行政区分である」と単純化して考えないようにしたい。

(3) 地域を見る2つの視点と課題

地域を見る時、次の2つの視点が有効だと地域学は考えている。ひとつは〈「わたし」からの視点〉(仲野誠, 鳥取大学地域学部地域政策学科)である。問題に直面していきなり地域という空間的・集団的枠組みで発想するよりも、まずは「わたし」から考えたい。というのは、地域という枠組みからの発想は、ときに「一人ひとりが生きられる」という地域への期待を見失うことがあるからだ。「地域全体をどうするか」、そればかりが関心の対象となると、地域で暮らしている人々のことが忘れられてしまう。そのため、住民の、自分たち一人ひとりが地域を担うのだという気持ちを弱めることになりかねない、そういうこともあるだろう¹⁶。また、今日、個人化の行き過ぎがさまざまな問題を生んでいるとはいえ、やはり「個人の自由」は尊重されるべき価値である。「わたし」から発想することで、「個人の自由」を前提にしつつ「わたし」をとりまく様々な関係性や構造、人と人との結びつきを具体的に思い描くことができるのではないかと、一つひとつをしっかりと検討することが可能になるのではないだろうか。この方法はまた、徹底した個人化に起因する諸問題を照らし出し、「わたし」から出発して「みんなに関わること」、すなわち、さまざまな形の「公」を発見させてくれるのではないだろうか。換言すれば、こうしたプロセスを経てこそ、地域を発見し、そこに生きる意味を理解できるのではないだろうか。それは同時に、地域に存在する様々な問題を見出すことにもなるのではないだろうか。このようなことが〈「わたし」からの視点〉の大きなメリットだと考えられる¹⁷。

このような評価については、もう少し説明が必要だろう。問題は、「わたし」だけにとどまらず、「わたし」を取り巻くさまざまな関係性や構造をどうすればしっかりと捉えることができるか、で

¹⁵ 明治以降の市町村合併がどのようにして小さな地域を破壊してきたかについては、赤坂前掲書214-218頁を参照。

¹⁶ 「地域力フォーラム2010 地域・コミュニティ・共同体の『未来への可能性』」(2010年5月9日, 明治大学リパティタワー)におけるパネル・ディスカッション第3部「首長の力」における岡庭一雄長野県阿智村長の指摘。

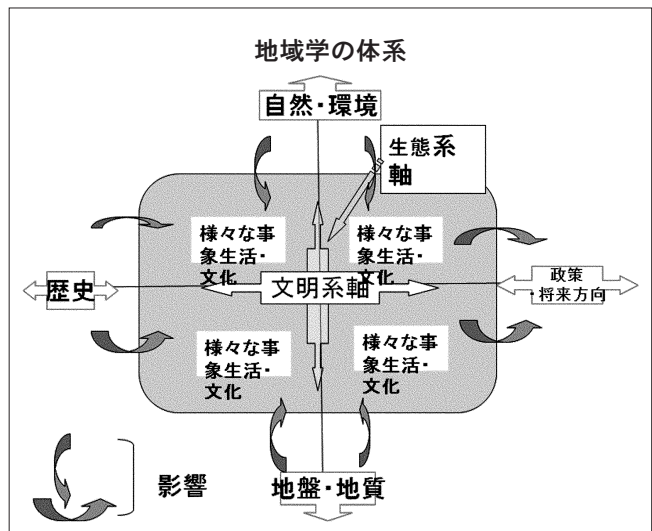
¹⁷ 〈「わたし」からの視点〉については、詳しくは以下を参照。柳原邦光『『地域学総説』の挑戦3』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第5巻第2号, 2008年, 180-182頁, 柳原邦光, 韓燕麗・仲野誠・野田邦弘『『地域学』を創る-鳥取大学地域学部の試み-2』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第5巻第3号, 2009年, 257-258頁, 柳原邦光『『地域学総説』の挑戦4』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第6巻第2号, 2009年, 199-200頁。

ある。仲野は3つの知的往復運動を提案している。①構造の次元の把握については、「わたし」の「いま・ここ」を規定している社会構造・産業構造・価値／規範・制度・振る舞いのなどの次元を自由に往復して、そこに「わたし」を位置づけること、つまり、「わたし」を相対化すること（次元間の往復）、②空間的關係性については、わたしたちの日常であるローカルと、それと密接に関連しているナショナル、グローバルのレベルとの間を往復して、「ここ」を相対化すること（空間の間の往復）、③時間的關係性については、過去・現在・未来という時間の間を往復して、「いま」を相対化すること（時間の間の往復）、である¹⁸。3つの往復運動は「わたし」の「いま、ここ」をしっかりとして位置づける方法なのである。それはまたどのように振舞うのか、働きかけるかを考える方法でもある。

この位置づけの意味を異なる角度からみれば、次のようにいうことができる。〈「わたし」からの視点〉を提示した仲野にとって重要なのは、人々がさまざまな意味でのつながりを回復すること、あるいは、つながりを見出すことである。他者とつながる作法を発見し身につけて、「抛りどころ」であるはずの地域を自分の手に取り戻すことである。そのために、一見すれば私的なものにみえる、「わたし」の「いま、ここ」から、自分の足元から、考えることを提案するのである。地域を自明視して、そこから発想するのではなく、「わたしによって、あるいは人びとによって生きられている地域とは何か」を問うのである。この地域を見るための、つながりのありようを発見するための、さらにいえば、それを絶えず修正して生きやすい方向にもっていくための方法論が3つの往復なのである。仲野は、「わたし」の「いま、ここ」を起点とした3つの往復によって地域学への期待に応えようとしている。

しかしながら、この視点だけでは地域を捉えるには十分とはいえない。というのは、地域は「わたし」が存在する以前から存在し、そこには「わたし」には捉えきれない部分があると考えられるからである。このような現に在る地域を捉え、そこから望ましい地域を考えるためのもうひとつの視点が、地域のもつ構造と特性を捉えようとする〈構造的視点〉（光多長温）である。そして、そのための基本的な枠組みを図示したものが、光多作成の「地域のマトリクス」である。これによれば、地域の土台をなしているのは、自然・環境・地盤・地質で、その上で人間の生活が営まれている。地域とは、自然環境（生態系軸）と人間の営み（文明系軸）の相互作用から生まれたものである。つまり、人間の営みは自然・環境・土地という「土台」の上で、あるいはそれらとの関わりにおいて展開されるのであり、地域構造と地域性は2つの相互作用から生まれるのである¹⁹。

ということは、何もかも人間が主体



¹⁸ この点について詳しくは、柳原前掲論文『『地域学総説』の挑戦4』、第1章第2節を参照。

¹⁹ 光多は地域学の先駆的な研究としてウォルター・アイサードの「地域科学」を高く評価している。アイ

的に決定できるわけではないということだ。人間の生活のあり方も考え方も感じ方も、どの程度かはともかく、「土台」によって枠付けられている。自然という、恩恵でもあり制約でもあるものの中で、人々は工夫を凝らして暮らしをつくってきたのである。

この「土台」はところによって、土地によって異なる。したがって、地域構造と地域性の重要な源のひとつだといえることができる。自然という土台と人間の営みとの関係を、地域学の場合とくに考慮すべきであろう。地域を考えるとき、人間と自然との具体的な関係を検討することから始める必要がある。

これは仲野の〈「わたし」からの視点〉にも当てはまる。「わたし」の「いま、ここ」を多様なつながりのなかに位置づけるというときも、この土台との関係を視野に入れるべきであろう。土台は仲野のいう「構造」を枠付けている。社会構造や産業構造だけではない。たとえば、自然に対する感覚や感性は、自分の存在を時の流れの中にどのように位置づけるのか、死をどう捉えるのか、死者とどのような関わりをもって生きるのか、という死や死者の世界に関わる問題に連なる。わたしたちはこういう問題について感度が鈍くなっているのかもしれないが、無関係には生きられないはずである。つながりの問題を検討すべきは、この世のことだけではないということである²⁰。

さらにいえば、地域は人間の大地への働きかけによって長い時間をかけて歴史的に形成されたものであり、同じように人間の働きかけによって変化していくものでもある。地域を考えるとき、この歴史性を忘れてはならない。

筆者は光多の「地域のマトリクス」をこのような深い意味をもつものとして理解した。地域の構造や地域性も同様である。地域を把握する試みは、基本的に「地域のマトリクス」に基づいて行われ、この試みのなかで諸々の学問領域が動員されることになる。地域学が学際的だとされる所以である。

ただし、この点に関して付け加えておかねばならないことが2つある。ひとつは、実際に地域を捉えるためには、現場に足を運んで、地域の人々への聞き取り調査も含めて徹底的に現場で調べることを、すなわち「現場主義」が必要だということである。

「現場主義」に関連して、もうひとつ重要なことがある。地域学を構成するのは、西欧近代に由来するアカデミックな知、いわゆる学問だけではないということである。地域学の究極的な目的は「生の充実」や「わたし（たち）の幸福」の実現に寄与することである。そうであるならば、生活の場で生み出された知や実践活動こそが重要である。地域学はこのような知を吸収して理論化されなければならない。それには、たとえば、結城登美雄のような「地元学」の仕事がとても参考になる。結城は驚くほど多くの農村を訪ね歩いて聞き取り調査をしてきた人物で、「土地を生きる人々の声に耳を傾ける」ことの重要性と必要性とを強調している。実際、具体例を積み上げて提示される結城の指摘にはとてつもない説得力がある。結城は、それぞれの土地に、生活のなかで蓄積されて

サードの地域科学については、W.アイサード『地域科学入門(1)』(大明堂、1980年)を参照。原書はWalter Isard, *Introduction to Regional Science*, New Jersey, 1975.である。

²⁰ 地元学の結城登美雄は鳥取市鹿野町で行われた「土地の力に根ざしたまちづくり」と題したパネルディスカッション(2010年2月7日)において、このことを強調している。内山節もまた、ヨーロッパと日本の地域観の違いを次のように説明している。ヨーロッパにおいて、「地域」とはそこに生きている人間達だけの世界である。しかし、日本の場合、自然と人間の世界であり、生と死をすべて含めた、あるいは統合した地域観である。ここで「自治」というとき、自然の世界と死者の世界を内部にもつ、そういう地域を自ら治めることを意味していた。「地域力フォーラム2010」の基調講演での発言。

きた知恵と技術と哲学があることを示して、それに学ぼうというのである²¹。この点、地域学も同様である。「生活の知」に学ぶことなくして地域学はありえない²²。アカデミックな知と「生活の知」、「生活の知恵」との出会い、それが地域学である。この問題については、後にもう一度言及する。

地域を捉える〈構造的視点〉について、最後にもうひとつだけ確認しておかねばならない。この視点は他の空間との関係において地域をみることとセットになっている。大きな空間の中で「地域」を位置付ける、といってもいい。たとえば、光多によれば、地域の経済や生活はローカルなレベルで完結しているのではなく、国家の経済政策・国土計画やグローバルなレベルの変動と密接にリンクしている。地域だけを見ていては、地域は理解できないのである。地域を見るには、日本を、世界をみる必要がある²³。

地域学にとって今後、方法論的に重要な課題となると思われることがある。それは、2つの視点、〈「わたし」からの視点〉と〈構造的な視点〉との関係を明確にして、うまく連携させることだ。2つはベクトルが異なる。一方は、地域の内側から一人の人間の目と心と感覚を通して地域を捉えようとする。他方は、現場主義に徹しつつも、地域から少し距離をおいて、地域のもつ構造、そのあり方を捉えようとしている。したがって、見えてくる地域像は、当然、異なる。しかし、地域学では2つの視点を対立するものだとか、別個の、まったく交わることのないものだ、とは考えていない。見えてくる地域像は確かに異なるが、それだからこそ互いを補い合うことが期待される、地域学にとって欠かすことができない視点なのである。したがって、地域学の方法論としての重要な課題は、2つの視点をどのように関係づけることができるのか、活かしていくことができるのか、ということになる。

2つの視点の関係について、現時点での筆者の理解を述べておきたい。〈構造的な視点〉は、地域という空間の構造と特性を解明し、そこから問題性とその解決方法や地域発展のあり方を考えるもので、そういう意味で、最終的に政策的実践に至ることを重視している²⁴。これに対して〈「わたし」からの視点〉は、政策を立てて問題を解決するというよりもむしろ、人々の目を社会や世界に、そしてその中での地域に向けて、地域の抱える見えにくい問題をえぐりだし、地域に対して切実な問いを立てること、換言すれば、「現実の地域」と「望まれる地域」との間にある隔たりを描き出すことに最大の力を発揮するのではないか。地域学はこのような問いをしっかりと受けとめることで、その実践性をよりいっそう深く豊かなものにすることができるだろう。

(4) 人の移動と地域

地域を見るときに気をつけなければならない、とても重要なことがある。それは、「わたし」も「地域」も変化の契機を含んでいることだ。「わたし」は移動する存在でもある。これについてもっともよく知られているのは、自分の生まれた国を出て外国で暮らす人たちの問題である。人の移動と地域という問題について、ここでは児島明（鳥取大学地域学部地域教育学科）の見解²⁵を紹介しよ

²¹ 結城登美雄『地元学からの出発 この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』、農山漁村文化協会、2009年。

²² 人と自然との関係の見直し、生活の知の再評価については、『農村文化運動』195号（農山漁村文化協会、2010年1月）所収の「5 経済グローバリゼーションと地域の再生」が参考になる。

²³ 柳原前掲論文『「地域学総説」の挑戦4』、第1章第3節「光多長温の視点—地域経済と地域のウエルフェア」、200-201頁参照。

²⁴ 「地域のマトリクス」と政策的実践の問題について詳しくは、柳原前掲論文『「地域学総説」の挑戦4』、206-207頁を参照。

²⁵ 柳原前掲論文『「地域学総説」の挑戦4』、202-203頁を参照。

う。

児島が最初に取り上げたのは日系ブラジル人の問題である。彼らの場合、国家の制度に十分に守られているとはいえない。たとえば、日本国籍をもたない彼らの子どもたちは、日本において教育を受ける権利を十分に保障されていない(義務教育の対象ではない)。また、両親の日常は自宅と職場との往復で終わったり、仕事が不安定で頻繁に職場が変わったりすることが多い。このために、地域の住民とほとんど接触がなく、地域と関わりの薄い生活を送るケースが少なくない。このような状態でどうして「いま・ここ」を自分の居場所だと思えるだろうか。彼らの生活から明らかになったのは、「自己のうちに新たな地域性を織り込んでいくことができない」こと、すなわち、自分の居場所だと思って安心して暮らすことができないことから生じる、「生きている」という実感が得られない、危機的な事態である。

児島によれば、人は移動するとともに新しい地域性を取り込んで、それを自己の中に積み重ねるようにして複数の地域性をもって生きていく。また、地域の人々にとって、移動する人々との接触は自明視された既存の境界枠を揺るがす。だとすれば、人も地域もともに常に微妙に変化しているということになる。日系ブラジル人のような国境を越えて移動する人々の存在はグローバル化の進展によってクローズアップされるようになったが、移動の問題はもっと多くの人々に関わる。人は進学・就職・転勤など人生の諸段階に応じてしばしば住むところを変え、新たな状況に適応していく。「人はみな移動する存在」なのである。ということは、人はたったひとつの地域性を生きているのではなく、濃淡はあるとしても複数の地域性ととも生きていくことになる。このように考えると、人と地域との関係は、これまで考えてきたよりもはるかに複雑であるといわねばならない。以上が児島の見解である。

この指摘を踏まえれば、地域は複数の地域性をもつ人々が暮らす場だというべきである。生れ落ちた地域(性)を離れて暮らす人々にとって、移動先の地域(性)にどっぷり浸かって暮らすことは難しく、ある程度距離を置いた関係になるのではないだろうか。人と人との関係は自らが選択した(選択されたということでもある)緩やかな様々な結びつきとなるように思われる。このような移動する人々の存在は地域に何がしかの変化をもたらしているだろう。この意味で、地域は常に変化にさらされているということが出来る。したがって、「誰もが生きられる」ためには、地域には変化を受容するだけの柔軟性が必要になる。「地域」を、実体として固定した、閉じたものというよりも、変化に対して開かれたものとしてみるべきではないだろうか。静態的ではなく、動態的にみる、そういう視点をもつべきであろう。これは地域学にとって、今後深めていくべき、きわめて重要な第3の視点になるのではないだろうか²⁶。

²⁶ 赤坂憲雄は、「いま、故郷はどこにあるか——地域学への問い」(『地域学への招待』所収)のなかで、日本の近代史を農村から都市への人口移動と棄郷/帰郷の観点から見ている。「地域」への着目、「地域学の可能性」は、明治以来「故郷」から切り離されてきた人々の意識が今どこに向かおうとしているのか、何を求めているのか、という問題と深く関わっているようである。「移動と地域」の問題はこの観点からも検討すべきであろう。赤坂はまた最新書『婆のいざない』において、「定住的思考」と「遊動的思考」という言葉で、今日の「地殻変動」の意味を説明しようとしている。赤坂はいう。心の拠りどころとなり、アイデンティティにとってもっとも大切な岩盤のようなものを「故郷」とみなせば、今は「複数の、いくつもの故郷をいやおうなしに抱え込んで生きる、それが当たり前になって」いる。今日では、唯一の「定点」と「故郷」を前提にした定住的な共同性に閉じこもって、異質なものを排除するのではなく、いくつもの「定点」と「故郷」を創り出すような遊動的思考へと向かわざるを得ない。閉じられたアイデンティティではなく、「やわらかく開かれたアイデンティティ」に耐えることを学ばなければならない。『婆のいざない』、258-260—

5. 身近な小さな世界から考える

以上が、鳥取大学地域学部の構想している地域学である。今は、基本的な考え方や視点を確認している段階である。建築物にたとえていえば、建物を支える基礎の部分をつくっている段階だといえる。礎石としてどんな石がいいのか、どのように並べていけばいいのかなど、いろいろな角度から検討している。基礎がしっかりしていないと、砂上の楼閣になってしまうからである。

この章では筆者の現時点での立ち位置を明確にした上で、私見を述べておきたい。筆者は、最近、漠然とした不安を感じている。確かなものが何もない、そんな不安である。大地の上をしっかり立っているという感じがしない。こんな感覚は筆者だけだろうか。いろいろな文献を読んでいると、社会の深いところで、大きな地殻変動が起きているように感じる。あらゆるものが揺れ動くなかですべてが見直されているようである²⁷。こうした動きのなかで、長い間、わたしたちの目に見えていなかったもの、あるいは、見ようとしてこなかったものが、おぼろげながら見えつつあるようだ。「地域」も、このような揺れの中でみえてきたものの1つではないだろうか。

筆者は地域学について語っているが、はじめから地域に強い関心があったわけではない。鳥根県の奥深い農村で農民の家に生まれ育ち、大学で大阪に出るまで暮らしたので、農村の良さも苦しさも、ある程度、わかる。といっても、これといって嫌な経験があったわけではない。近頃は、すでにこの世にない、かつての隣人たちの顔が浮かんでくることがあって、胸がいっぱいになる。おそらく、若いころ都会に出ることを望んだのは、空間的にも人間関係の面でも狭くて濃密すぎる生活から抜け出したかったからだろう。仕事として歴史学を、それも外国史であるフランス史を選んだのもこのことと関係があるかもしれない。生れ落ちた環境から自分の人生を切り離そうとしたのだろうか。この感覚は後々まで残って、学部が「地域学部」になると聞いたときは、「嫌だ」という思いしかなかった。ところが、どういうわけか、地域学総説の授業実施責任者になってしまい、自分の意に反して、地域を勉強せざるをえなくなった。今思えば地域学部の学生たちには本当に申しわけないことだが、どうにもしようがない。これが筆者の地域学の出発点である。

それでも、義務的にはあるが授業には真剣に取り組んだ。あるとき、筆者自身がお話を聴いてみたいと思って来ていただいた方々の講演に耳を傾けていると、ふと「まずい！」という感覚に襲われた。長い間心の中で抑えつけていたものがいきなり溢れ出てきたからである。かつての農村での暮らしの記憶、懐かしい感覚である。この感覚は次第に強まっていった。先日、仕事で山口市に行った。JR線で鳥根県の津和野市をすぎて山口市に向かうとき、思わず目を見張った。田植えを終えたばかりの水を張った田んぼが延々と続いていた。山間の田んぼであるから大きな景色ではないが、心を奪われて、見つめ続けた。車窓からゆっくりと流れ去って行くのは、しっかりと人の手がいって美しい農村の姿だった。米作りに励む農家の人たちの心を思った。感動しながら、耕作する者がいなくなって草木に覆われた祖父母の土地、父母の土地のことを思った。かつては田んぼも山々もきれいだった。当たり前だった風景は、父母の死とともに失われてしまった。いったい何百年続いた田んぼだったのだろうか。祖父母や両親の前にどれくらい作り続けてきた人たちがいたのだろうか。「申し訳ない」、初めてそう思った。わたしの代で長い営みを終わらせてしまった。

頁、266頁。「定住」と「遊動」については、西田正規「定住社会を考える」(『地域学への招待』所収)を参照。

²⁷ ジャン＝ポール・ヴィレームの前掲論文を参照。

もうひとつ地域学に深く関わる大きな動機になったのは、苦い挫折の経験である。生活を守るためには勇気を出して発言し闘わなければならないときがある。それには、問題状況をしっかりと把握して、自分なりの考えをもたなければならない。調べること、問題を整理することが必要だ。そうして自分の考えに自信をもつことができるからこそ、怯む気持ちをおさえて発言し、圧力に抗して闘うことができる。一人ではどうにもならないから、自分の考えを他の人たちに理解してもらえよう表現することも必要である。ひとりよがりではうまくいかない。しかし、実際に問題に直面してみると、これは思ったよりもはるかに難しいことだった。行政の暴走にストップをかけることができなかった。筆者を含めて住民は無力だった。何に基づいて判断するのか、指針として常に見つめるべきものは何か。わたしたちはそれを共有できず、生活を守ることができなかった。しかし、こんなことでいいのか。住民にとっても、行政にとっても、このままでいいのか。この気持ちが筆者を地域学に向かわせた。不快きわまりない、苦しい経験だったが、学んだことは多かった。この経験を活かさなければならない²⁸。

いやいや始めた地域に関する研究であったが、「今取り組んでいることは、とても重要なことではないのか、必要なことではないのか」という思いが膨らんでいった。そうすると、センサーの感度が格段によくなったのか、いい研究や素晴らしい活動をされている方々に出会うようになった。正直に言えば、今でも「まちづくり」だとか、中心市街地の活性化だとか、観光客を増やすとかいうことになる、頭も心もうまく働いてくれないが、地域について考えるとき、ここがポイントではないかという勘が少しは働くようになった、そんな気がしている。

今、筆者にいえるのは、地域について考えることは、何かをつかむ大きなチャンスかもしれない、ということである。閉塞感にとらわれたこの社会でこれからどう生きていくのかについて、何か希望が得られるのではないかと、少しでも確かなものに近づくことができるのではないかと、自信をもって現状に向き合うことができるのではないかと。

こういう思いや感覚をもったのは、ごく最近のことである。そのきっかけをいくつかの本からもらったので、これらの本を手短に紹介しつつ、受け売りではあるが、「身近な小さな世界から丁寧に考える」ことを提案したい。

1冊目は松場登美『群言堂の根のある暮らし しあわせな田舎 石見銀山から』(家の光協会, 2009年)である。著者は三重県の出身であるが、現在は世界遺産になった島根県の石見銀山で「群言堂」という雑貨と衣料品の店を経営している。著書の冒頭に次のような注目すべき文章がある。

山の中腹から眼下を見下ろすと、緑深い山あいには赤茶色の瓦屋根がきらめく集落を一望することができます。四方を山に囲まれた、まるですり鉢の底のような小さな町。この場所に身をおくと、自分が今ここに生きていることをひしひしと感じ、氣力が湧いてくるのです。ここが、わたしの居場所。大丈夫、ここでならやっつけていける。

この文章を見て、筆者は「松場さんはなんて幸せな人だろう」と思った。羨ましかった。というのは、このような感情を抱いたことがないからである。引き込まれるように読み進んで、鳥取大学の地域学が目指しているものが、すでに表現されているのではないかという印象をもった。人と人とのつながり、人と自然とのつながり、過去や過去の人々とのつながりなど、著者が様々なつなが

²⁸ 柳原前掲論文「『地域学総説』の挑戦3」、第4章「地域住民の生活と行政」を参照。

りのなかで生きてきて、そこから活力や発想を得ていることが、よく伝わってきた。「根のある暮らし」とサブタイトルがついているが、ここでいう「根」とは、もちろん、さまざまな「つながり」を指している。ちなみに、著者の最近お気に入りの講演タイトルは「足元の宝を見つめて暮らしをデザインする」である²⁹。

2冊目は内山節『「里」という思想』（新潮社、2005年）である。この本の内容は一部すでに紹介した。著者は、西欧近代に対する厳しい評価もまじえて、今という時代がどういう時代で何が求められているかをととてもわかりやすく、明快に表現している。内山にはたくさんの著作がある。そのなかには、地域学が参考にすべきものが多い。筆者はいずれ内山の著作とじっくり向き合っ、多くを吸収したいと考えている。

3冊目は結城登美雄『地元学からの出発 この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』（農山漁村文化協会、2009年）である。著者は民俗研究家で、執筆活動や講演活動のほかに「地元学」を身をもって実践している人物である。この本のなかで、著者は「地元学」を次のように説明している。「地元学」は「理念や抽象の学」ではない。「地元の暮らしに寄り添う具体の学」である。ここでの主役は行政ではなく住民である。すなわち、人と人との関係に配慮して生活する人々である。「地元」とはこうした人々の相互関係によって成り立つ場所である。それゆえ、「地元学」は「その土地を生きた人びとの声に耳を傾け」、「これからの家族の生き方、暮らし方、そして地域のありよう」を学ぶものである。著者の「地元学」は次の文章に集約的に表現されている。同書に収められた文章ではないが引用しておこう。

経済を絶対の基準としてきた私たちの社会が揺らいでいる。大きいを良しとしてきた価値観が問われている。人は土地を離れて生きていくことはできない。地域とは家族の集まりである。もう一度、同じ地域を生きる人びとと関係を再構築するために、それぞれの地元で隠れている人や資源や知恵や哲学を学び直すこと。そして自分の暮らす場所の未来を他者にゆだねないこと。さらに、自分もまたここを良くしていく一人の当事者になること。その力を合流させ、自分たちと次世代が生きやすい場所に整え直すこと。それが私の地元学である³⁰。

「地元学」の精神と視点はこの文章の中に見事に表現されている。結城はいう。これまでもっばら経済というたった一つの基準から発想してきたこと、数の論理だけでものごとを捉えようとしてきたことが、いかに人々の眼を見えなくしてきたことか、貴重なものを棄てさせてきたことか。「性急に経済による解決を求める人間には、ここには何もないとみえてしまうだろうが、わが地域を楽しく暮らそうとする地元の人々の目には、資源は限りなく豊かに広がっているはずである。」³¹厳しい状況のなかでも楽しく暮らそうとしてきた人々の知恵と工夫をみてみよう。そうすれば、金銭によって得られる豊かさとは異なる豊かさが見えてくる。そこから、力を合わせて自分たちで生活を創っていこう。それを次の世代に伝えようというのである。

結城は自らの足で集めた数多くの事例を紹介しているが、そこで提示された独自の解釈は、長い時間のなかで続けられてきた人々の営み、日常の暮らしの細部を見つめるよう促す。たとえ小さな些細なことにみえても、そこに確かなものを見出すことができるかもしれない。筆者は、地元学の

²⁹ 詳しくは、柳原前掲論文「松場登美さんの仕事に学ぶ」を参照。

³⁰ 結城登美雄「地元学をめぐる」、『季刊東北学』第6号（2006年）、71頁。

³¹ 結城『地元学からの出発』、2頁、115-122頁。

精神と地域学のそれとは響き合うと考えている。

最後は、吉本哲郎『地元学をはじめよう』(岩波書店, 2008年)である。著者は、水俣病でよく知られている水俣市の市役所で仕事をしてきた人で、「地元学」というときに、結城と並んで必ず名前が出てくるほど、著名な人物である。著者の「地元学」の特徴はその方法にある。「あるもの探し」は地元学の基本的な方法のようであるが、吉本の場合、調査結果を絵地図(「地域資源マップ」)に書き込んでいくのが面白い。それは次の方法である。「ここには何もない」ではなくて、「ここにあるもの」、「足元にあるもの」を探すことからスタートする。自分の住んでいるところにあるもの(たとえば草木、水の流れ)を外部の人も含めて、みんなで探して、写真を撮り、詳しく調べて、絵地図にまとめる。外部の人たちの参加を重視するのは、彼らが驚いて質問したことに答えながら、地元の人たちが自分たちの暮らしの力に気づくようになるからである。こうした一連の作業をすることで、「足元にあるもの」に気づくまなざしができていく。それまで知らなかった、自分たちの住んでいる地域のいいところ、地域の暮らしを支えてきたものや仕組みがはっきり見えてきて、自分たちにとって何が大事なかがよくわかるようになる。こうして発見したことこそ、本当の「地域資源」であり、「地域の力」である、と著者はいう。そして、得られた成果を地元の人たちの前で発表して、みんなで共有する。絵地図にして、みんなで話し合うことで、「あるもの」を新たに組み合わせる「今までにないもの」を作る、そんなアイデアと元気が出てくる。目に見えないもの、隠れた力を見えるようにする方法は、参加者の地域への関心と愛着、さらには誇りを大いに高めて、自ずとあれこれ工夫するようになるのだという。

最後に、著者はとても重要な指摘をしている。若者が「地元学に関わるなかで、あるがままの自分をそのままあるものとして見ていき、自分のもっている力に気づいている」というのである。これは、地元学を通して「地域が見えてくる」だけではなくて、「自分が見えてくる」ということである。考えさせられる指摘である³²。

筆者の理解では、4人はみな同じことを述べている。つまり、自分の足元をよく見てみようというのである。自分の育ってきたところ、生活しているところに、その人にとっての宝があるのではないか。自分を支えるものがあるのではないか。まずは、足元を、自分の目で見てみよう、そこで生活する当事者の一人として考えてみよう、行動してみようということである。明示されていないかもしれないが、筆者は次のようなメッセージを受け取った。それは、このようなプロセスを経て人は誇りと自信を取り戻して、自分のなかに確かなものをつくっていくことができるのではないか、ということである。これは不安のなかで希望へといたるひとつの道筋を示しているのではないだろうか。「『里』の思想」であれ、「地元学」であれ、これをどう名づけるかはさほど重要ではない。重要なことは、こうした考え方がまさに「地域学」のエッセンスを構成する重要な部分となるのではないか、精神になるのではないか、ということである。

地域学が求められている今このときこそ、どこを、何を見据えて、学としての基礎を構築するかをよくよく考えねばならない。わたしたちは、「地元」や「ローカルの世界」を、要するに生活の世界をもっとじっくり見つめるべきではないだろうか。そうすれば、そこに豊かな泉を見出すことになるのではないだろうか。「わたし」の足元から、生活の世界から捉え直すことで、これまで見えなかったこと、見ようとしなかったことがみえてくるのではないか。もちろん、このアプローチは

³² 吉本は次の論稿で自らの地元学を簡潔に語っている。吉本哲郎「地元学、地域の資産を再発見する」、*CEL, Jun*, 2005, 17-20頁。

ナショナルなもの、グローバルなものを無視することを意味しない。生活の世界から始めて、もっと大きな空間やナショナルなもの、グローバルなものを捉え直すのも、地域学にとって有効な方法のひとつではないか、そう筆者は考えるが、どうだろうか³³。これは筆者から地域学への提案である。

おわりに

それでは最後に、われわれの地域学の現在を簡潔にまとめることにしよう。地域学の目的は、「地域」という空間で「生の充実」、「わたし（たち）の幸福」の実現に寄与することである。「地域」とは、自然環境や社会環境、人と人との結びつきを含めて、何らかのまとまりをもった、緩やかで曖昧な空間である。地域学の基本的な仕事は、この空間において、経済的な諸条件を含めて「人として安心して幸福に生きていく」ために必要な諸条件とはなにか、それを実現するにはどのような方法があるのか、を考えることである。人と人との関係についていえば、人と人が支え合う関係とそのための場を発展させる諸条件と方法を考えることである。換言すれば、「現実の地域」と「望まれる地域」との間に隔たりがあることを認めて、これをできるだけ埋めていくことが、地域学の目標である。この意味で、地域学は「実践の学」なのである。

地域は決してあらかじめ大きさを特定できる空間ではない。あくまで、検討されるべき問題によって地域の広がりが決まる。地域はまた単独で存在できるものでもない。他の空間との関係性・重層性を常に視野に入れて検討されなければならない。地域学の対象とする空間規模は多様で、その関係は複雑である。

しかし、ひとまずローカルな空間を出発点として考えたい。というのは、ローカルな空間は人々の身体が存在する暮らしの場であり、生身の人間としての存在はここから始まると考えられるからである。「地域」や「地域学」への期待が現代を生きる人々の根源的な不安に由来しており、生活に近いところで考えることが求められているだけに、この空間において日々の生活を支える諸関係、「生きている」という実感につながる様々な「つながり」、これらを確認したいのである。「つながり」として最初に想起されるのは、人と人との結びつきであるが、それだけではない。自然との関係、土地との関係、過去との関係、死者や死の世界との関係、もちろん、労働や生産に関わる関係も含まれている。このような諸関係を総体的に捉えて「地域性」ということができるだろう。

どのような空間規模で考えるとしても、地域学は、地域性の解明にとどまるのではなくて、国家の諸制度や経済システムなど、地域を越えるものとの関係も検討しなければならない。そうして、地域性を尊重しつつ、誰もが人として生きやすい状態を考え、そのために実践することを目指すのである。このとき動員されるのは、アカデミックな知だけではない。地域学は、暮らしの場に生きている知恵・技術・哲学（「生活の知」）に多くを学ばなければならない。地域学は2つの知の接近

³³ このような見方については、二宮宏之『歴史学再考 生活世界から権力秩序へ』、日本エディタースクール出版部、1994年を参照。赤坂憲雄は小さな地域に着目する意義と可能性を次のように述べている。「小さな地域こそが国家を超えて、より大きな世界へとつながってゆく契機となるかもしれない。あるいは、異質なものがともに生きてゆくための道筋をデザインする、たいせつな拠りどころになるのかもしれない。だからこそ、みずからの拠って立つその場所を、ひとたびは肯定しなければならない。それがいずれは、内なる他者や、異なった民族や地域の文化や歴史、あるいは風土といったものを肯定し、ともに生きる可能性へと開かれてゆく手掛かりになるかもしれないと思うのです。」赤坂前掲書235頁。

の試みなのである。

地域性を把握し、そこから「誰もが人として生きやすい状態」を考えるのは、容易なことではない。地域学は、人と地域との関係を捉えるための視点として次の3つが重要だと考えている。

ひとつは〈「わたし」からの視点〉である。この視点は地域を自明視してそこから発想することを前提にしてはいない。むしろ地域の存在と意味を実感できない「わたし」が様々な「つながり」を発見するための作法である。「わたし」が想像力を介して生きている空間（「生きられた空間」）を知るための方法なのである。こうして得られた認識から、「わたし（たち）の幸福」にとって何が重要なのか、「何が問題なのか」、「これからどうしたいのか」、「どうするのか」を考えるのである。

2つ目は〈構造的視点〉である。地域は自然環境と人間の営みの相互作用から生まれたものであるが、どのような構造と特性をもっているのか（地域性の解明）、さらには、地域を越える、もっと大きな空間においてどのような位置関係にあるのか、など、地域のなかにいる「わたし」からは見えない関係性を、地域から距離をとりつつ解明しようとする視点である。さらに、〈「わたし」からの視点〉で捉えた問題を含むさまざまな問題の解決や望ましい状態の実現、そのための方法を考える、政策的実践へと向かう視点である。

3つ目は〈移動の視点〉である。人は移動する存在である。この視点から見たとき、人と地域（性）との関係はとても複雑なものになる。様々な関係や「つながり」は確固としたものではなくなる。それらは相対化されるのである。というのは、人は唯一の関係のあり方、「つながり」の型だけでなく、複数の地域（性）を生きているからである。この視点に立ったとき、地域は「開かれていること」、「柔軟性をもつこと」を期待される。移動する人々にとって、人と人との「つながり」は選択的なものになるだろう。地域にはそれを許容することが求められるだろう。

以上が、現時点において語ることのできる、鳥取大学地域学部の地域学である。改めて思うのは、本稿が描き出そうと取り組んできたのは、人々の生や暮らしをよくしていくための実践的な方法論というよりも、「地域を考えると、地域に向かうとき、つねに視野に入れておくべきことは何か」ということである。これが「地域学の現在」である。

【「地域学総説」関係の論文等】

- ① 柳原邦光『「地域学総説」の挑戦』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第3巻第3号, 2007年
- ② 柳原邦光『「地域学総説」の挑戦2』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第4巻第2号, 2007年
- ③ 柳原邦光, 光多長温・吉村伸夫・一盛真・家中茂・藤井正『「地域学」を創る－鳥取大学地域学部の試み－』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第4巻第3号, 2008年
- ④ 柳原邦光『「地域学総説」の挑戦3』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第5巻第2号, 2008年
- ⑤ 柳原邦光, 韓燕麗・仲野誠・野田邦弘『「地域学」を創る－鳥取大学地域学部の試み－2』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第5巻第3号, 2009年
- ⑥ 柳原邦光『「地域学総説」の挑戦4』、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第6巻第2号, 2009年
- ⑦ 柳原邦光「松場登美さんの仕事に学ぶ」、『地域学論集(鳥取大学地域学部紀要)』第7巻第1号, 2010年

(2010年5月24日受付, 2010年5月24日受理)